

体育での学び合いによって芽生えた体育科への興味に関する研究 —小学校教員志望の女子学生に着目して—

Interest to physical education grown by cooperative Learning of the physical education class
—forces female student of intending elementary school teacher—

丸 井 一 誠
Kazumasa MARUI

〈要旨〉

本研究では体育科に興味をもった小学校教員志望の女子学生の運動経験、とりわけ体育授業において行われた“学び合い”に着目しながら、どのように体育科に興味をもっていたのかを明らかにしていくことを目的とする。

その結果、“学び合い”では「運動が苦手な子を教える」という立場で、運動が苦手な子に対して「運動を楽しんでもらいたい」という態度をとっている。また運動が苦手な子に対して「気づきを促す助言」や「運動遊びの仕方の工夫」をすることで、運動に取り組む姿勢が変化したり、できないことができるようになった。そのような変化に対して、体育の魅力を感じ、体育科への興味をもっていたと考えられる。これらの背景には、教える側の運動有能感、運動が苦手な子がやってみようと思ってもらえる関係、そして教員の間接的な支援があると考えられる。

〈キーワード〉

体育科への興味、学び合い、小学校教員志望、女子学生

1 はじめに

「平成25年度全国体力・運動能力・運動習慣等調査結果」によると、小学生の運動習慣は1週間の総運動時間が60分未満の男子は9.1%、女子では21.0%である。女子は中学生になると29.9%と増加する。そのなかでも1週間の総運動時間60分未満のうちで運動をまったくしない、つまり0分なのが、小学校女子では47.6%、中学校女子80.2%であり、運動習慣の二極化が読み取れる。さらに運動時間の少ない子は体力レベルにも差が生じている（文部科学省、2013）。これらのことから、女子の運動離れは体力的な側面から見ると深刻な問題であり、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図る」（文部科学省、2008）小学校体育科の役割は重要であるといえよう。

一方、小学校教員の男女比に着目してみると、文部科学省の「平成25年度学校基本調査」によると、小学校では62.5%が女性教員である（文部科学省、2013）。過半数以上を占める女性教員の活躍は小学校教育において不可欠であるといえる。小学校教員は複数科目を指導することになっているが、体育科に着目してみると、体育の指導が最も

得意な教員は男性が25.3%と比べ、女性は6.3%と低い。また体育の指導が最も不得意な教科である教員は男性が2.3%と比べ、女性は14.5%となっている。さらに体育の研究所属部会は男性が10.7%に比べ、女性は3.7%と低くなっている（白旗、2013）。これらのことから小学校の男性教員に比べ、女性教員は体育の指導が苦手といえる。

この背景には、女性教員自身の運動経験とこれまで受けていた体育の経験が、教員になった際に、体育の指導に影響しているためだと考えられる。小学校教員の過半数以上が女性教員であり、少なからず女性教員が体育科に関して不得意感をもっていること、さらに女子の運動離れが深刻である現状を踏まえると、体育科の役割は大きい。このようなことから体育の指導が得意な女性教員の養成は急務であり、不得意感を払しょくするには、まずもって体育科への興味をもってもらうことが先決であるといえよう。

女性教員自身が教員になる前に、つまり幼少期から大学生期を通じて適切な運動経験を積んで体育科への興味をもっている女性教員あるいは女子学生は、どのような運動経験を積んできたのだろうか。もし体育科への興味を誘発された適切な運動経験を明らかにすることができたら、その

ような適切な経験を体育の授業で味合わせることが有意義である。

これまで体育科への興味をもった小学校教員志望の女子学生の運動経験に関する研究はなく、体育科への興味をもった要因を深く掘り下げて分析することもなかった。

本研究では体育科への興味をもった小学校教員志望の女子学生の運動経験、とりわけ体育授業において行われた“学び合い”に着目しながら、どのように体育科に興味をもったのかを明らかにしていくことを目的とする。

2 体育科に興味をもったきっかけとなった“学び合い”

2-1 体育における女子の“学び合い”

小学校教員志望の女子学生が複数の科目がある中で、体育科に興味をもったと考えられるひとつの理由として、運動教材を通じて教えることの魅力を感じたからだといえる。体育科のどのような要素に魅力を感じて興味をもつかというと、その要素は男女で異なる。

これまでの体育における女子の態度に関する先行研究を概観してみると、徳永らの研究（1980）では、体育授業において小学生女子は「集団活動」、「観戦・応援」、大学生女子は「人間関係」、「観戦・応援」の因子が男子と比べ、有意に楽しいと感じていた。大杉らの研究（2008）では、中学・高校女子は男子よりも「仲間（チームワーク）」、「まもる」および「協力」因子を体育授業で重要視していると推察された。「平成25年度全国体力・運動能力・運動習慣等調査結果」では、女子児童・生徒がもっと運動をしてみようと思うための条件として「好き・できそうな種目があれば」に次いで「友達と一緒にできたら」が50%を超え、2番目に高い項目であった（文部科学省、2013）。

これらの先行研究から、体育において女子は男子よりも“協力的な学習”つまり、友人との“学び合い”を好む傾向があるといえよう。すなわち、体育科に興味をもつ女子学生の多くは体育での“学び合い”を通じて体育科の魅力を感じ、体育科への興味をもったのではないかと考えられる。

本研究では、学び合いを「小グループの教育的使用であり、学生が自分自身の学びと学習仲間の学びを最大限にするために共に学び合う学習法」(Smith,1996)として定義し、論考していく。

小学校教員志望の女子学生における体育での“学び合い”は、運動課題を解決するために共に学び合うことにより、運動課題を達成したことへの喜びを感じたり、何かを学べたことが体育科への興味を抱いたことが中核的な内容であると考えられるが、その“学び合い”の場には、体育科に対する何らかの情動や印象を喚起する魅力的な体験があったと考えられる。

本研究では、女子学生が体育科に興味を持つきっかけのひとつのである“学び合い”に着目して、深く掘り下げていく。

2-2 “学び合い”の背景

人と人との営みのなかには、関わる相手を取り巻く背景、当事者の過去の経験、当事者の抱える「理論」によって（鯨岡、2005、p29）、その営みの事象の意味合いは異なる。“学び合い”も同様に、お互いの運動経験や運動・体育に対する価値や意味によって、“学び合い”の意味合いが異なる。

この“学び合い”においてどのように感じ、どのように意味付けをするかは当事者の主観的な捉え方によって異なってくる。

人々の主観的視点と彼らが経験や出来事に与える意味に焦点を当てたり、また事物、行為、出来事などの意味を志向したりする研究方向は、質的研究一般のなかでも大きな比重を占めている（フリック、2002、pp25-26）ことから、“学び合い”から生じた当事者の主観的な捉え方を深く掘り下げて明らかにする意義は大きい。

したがって本研究では、女子学生の運動経験、運動・体育に対する価値や意味、つまり背景を踏まえて、“学び合い”を明らかにする。その際、エピソード記述（鯨岡、2005）を参考に、出来事や女子学生がその出来事から捉えた感じ方について、分析および考察を行い、女子学生がどのように体育科に興味をもったかを明らかにしていく。

3 方法

3-1 対象

はじめにK大学で体育科への興味をもった小学校教員志望の19歳の女子学生4名のなかから、体育授業の“学び合い”を通じて体育科への興味をもった女子学生2名を抽出した。抽出した対象者の背景については幼少期における運動に関する好意と興味の高まりの経験、体育の位置づけ、体育授業における自分の立ち位置の3点を背景としてインタビューを行い、以下、簡潔にまとめた（表1）。

表1 対象者の運動・体育に関する背景

	幼少期の運動に関する好意と興味の高まり	体育の位置づけ	体育授業における立ち位置
A	運動することは好きではあるが、好んでするわけではない 体育の持久走は辛いのでやりたくない 走ることだけは得意で、とくにおにごっこは仲間からコツを教えてほしいと言われたことから運動への興味が高まる	教室じゃない 座らなくていい 授業中にしゃべってもいい	人より運動は得意だけど、「よし、やるぞ」というタイプではない ガツガツやるのは嫌
B	運動は好きでも嫌いでもないが、足は遅く、不器用と自覚 運動能力は標準より下のレベル 市内の小学校同士の連合運動会をきっかけに走る記録が伸びる嬉しさやリレーのメンバーに選抜されなかった悔しさを経験し、運動への興味が高まる	全力で取り組むことができる 練習すると記録が伸びていく	グイグイ引っ張っていくタイプ 同じ環境だから、とにかく誰かに負けたくない とくに男子に負けたくない

3-2 データの収集方法

対象者には本研究の目的、協力することの利益と不利益、研究協力の任意性、個人情報保護、情報の公開、成果の公表について理解してもらうように、口頭および文書にて説明した。調査への協力を承諾してもらったのち、文書にて承諾の手続きを行った。そしてありのままを語ってもらえるように促し、インタビューガイドを基に半構造化インタビューを行った（表2）。データ収集は2014年5月に1対1で研究室にて行われ、対象者にデジタルカメラでの音声録音ならびに動画撮影をしながら、インタビューを行った。インタビューが行われた時間は各50分の間であった。

表2 インタビューガイド

1. その学び合いでの相手との関係はどのような関係でしたか
2. どんな教材で、その場ではどのような学び合いが行われましたか
3. 学び合いを通じて、どのような所に体育の魅力を感じ、興味をもちましたか

3-3 データの分析方法

“学び合い”から体育科への興味をもったエピソードを基に、音声内容を抜き出し、逐語録を作成した。

逐語録を基に体育科への興味をもった要因に関する部分を抜き出して分析および考察を行った。相手の印象については逐語録から相手の印象に関連する言葉を抜き出してコーディング、“学び合い”における学習状況に関する内容はエピソード記述を参考に、分析を用いた。なおエピソードに関するインタビューにおいて括弧は分析者が語り手の話を聞いて、話の文脈から言葉を補って示したものである。

4 結果と考察

4-1 “学び合い”での相手の印象

Aのインタビューから「ぼっちゃりしていて、足が遅く、ぜんそく持ちで誰が見ても遅いなって分かる子」「やる前からやる気がない」「最初から無理やし、やりたくないから頑張らない感じ」「たいてい体育で一人になってしまおう」「席も近いこともあり、割としゃべる機会が多い」という印象であった。

Bのインタビューから「私よりも小さいく、腕とかも細い」「中学のときに一緒にテニス部で腕が折れそうなんです」「跳び箱をする際『えっ。だれかそこにおってや』って感じ」という印象であった。

A・Bともに元々、運動することにとっても好意を持っているわけではないが、仲間から運動能力を認められたり、運動を繰り返し行うことによって記録の伸びを確認しており、運動に対して肯定的な経験をしている。これらの肯定的な経験を踏まえ、日ごろから接点はあるながら、運動が苦手な子と一緒に“学び合い”を行う機会が、体育科への興味を抱く前提になると考えられる。

さらにAのインタビューから「授業前にそんな関係（席が近く、割としゃべることが多いこと）ができてるっていうのがよかったのかもしれない。」「（体育の）先生から見ても（普段から）私とその子と一緒にいることは異色みたいで。」ということから、体育での“学び合い”において授業外、すなわち学級や部活動といった体育以外の時間において運動に関する助言をしても運動が苦手な子が受け入れてもらえる関係があることが前提にあることが考えられる。

4-2 “学び合い”における学習状況と相手の変化した助言および工夫

【エピソード1】

Aは“学び合い”での学習状況にて、以下のように語っ

ている。なお、Aと“学び合い”を行った運動が苦手な子をA'とする。

中学の持久走の時にA'がやる気がすんごくなかったんですが、中学の（体育の）先生が電光掲示板を用意してくれて「1周何秒でいいから走ったらいいんじゃない？」って言ったら、しっかり走れたってのを覚えてます。A'は（いつも）最初、全力で走ってだんだん落ちていくんですよ。（私が）「最初、頑張らなくてもいいから、同じペースを守って走るのに変えてみたら」って言ったら、A'のタイムが伸びて。あとA', いつも走ったら、本当に辛そうなんですけど、すごい表情して帰ってきて、「なんか変わったんやな」って分かって。ちょっとといえば変わるんだなって思いました。

本エピソードは持久走での場面である。持久走は児童にとって体育のなかでも嫌いな種目の一つでもあり、「苦しい」「つらい」「嫌だ」といった理由を持ち、意欲が上がりにくい種目である（前田，2013）。

もともとA自身も持久走は苦手なこともあり、またそれほど運動に意欲的に取り組む方ではないと自覚している。それにもかかわらず、普段から一緒にいることがあるA'はさらにやる気がなかった態度が、何とかA'に楽しく取り組ませたいという気持ちになっていることが読み取れる。また体育の先生が用意してくれた電光掲示板を利用し、時間配分を踏まえて走るよう勧めたことをA'が受け入れた。その結果、今までの走りと比べてより良い走りができ、AはA'の充実感を感じとっている。AはA'に助言したことを通じて、相手の変化を実感できたことから、体育の魅力を感じ、体育科への興味を高めたと考えられる。

【エピソード2】

Aは別の機会でA'との“学び合い”での学習状況にて、以下のように語っている。

あと球技とかで、苦手な子ってたいてい端っこにいるんですよ。みんなでボールを回したりするんですけど、（そのA'はボールを）取りたがらない感じだったんで。「ディフェンスだけでも入ったらいいんじゃない」ってみんなで言いました。「ボール捕らんでいいからここに立つとけば、妨害できるよ」って。それは本当にみんなで（強く）言ったら、ちょっと球技楽しそうな顔をしてたんで。球技は参加した方が絶対楽しいと思う。ちょっとでも（ゲームに）入ったら（ゲームを楽しめるから）違うのかなって思いました。

本エピソードでの球技とは、インタビューからハンドボ

ールとバスケットボールを指す。ハンドボールなどのゴール型の教材では、運動の苦手な子はしばしばエピソードにあるような現象が観察される。

ゴール型の教材の特性は2チーム間でルールに従い、ボールを媒介としてゴールにボールを入れることを目的に攻防が行われる。今日のゴール型の教材の一般的な戦術は、全員で攻め、全員で守り、得点を競うことを前提としている。

運動の苦手な子の特徴として、技能のつまづきや運動能力の低位に対する劣等感を感じている（清水，2002）。とりわけゴール型教材では「ボール操作」と攻撃時における「ボールを持たないときの動き」を中核的な技能としているため、運動が苦手な子はこれらの技能の習熟度が低いことから劣等感を感じ、積極的にボールをもらおうと動こうとしないことが考えられる。

本エピソードでは今日の一般的な戦術とは異なり、A'に守備をする役割に特化し、活躍の場を与えている。A'にボール操作を取らせて行かせず、ボールとゴールの間に位置を取って攻撃者を妨害する守備をする役割に特化させて行かせたことは、劣等感や技能のつまづきが表出しにくく、結果としてチームの一員として貢献することができた。守備に特化させたことはA'にとってゲームを楽しめたことにつながったと考えられる。

このようにA'に役割を与え、チームの一員として活躍させることができたことに体育の魅力を感じ、体育科への興味を高めたと考えられる。

【エピソード3】

Bの場合は“学び合い”での学習状況にて、以下のように語っている。なお、Bと“学び合い”を行った運動が苦手な子をB'とする。

とりあえず（B'は）歩いてロイター盤に行って、止まって手を着いてから飛ぶんですよ。そんなんじゃないか跳べないに決まっているじゃないですか。「ロイター板で踏み切って跳べばいいんだよ」って言ったら、「弾むやん、これ。」って弾むのが怖いって言っていたので。ジャンプして遊んだり、台の上に座って話したり、遊んだり、とりあえず物体に慣れさせないといけないと思って。私は跳ぶだけやったら全然できるんで。それで先生に「教えてやれ」って（言われました）。結局、（慣れさせたら）B'は跳べたんで。4、5段だと思うんですけど、跳ばせることができて嬉しかったです。

本エピソードは器械運動の跳び箱運動の開脚跳びの場面である。

跳び箱運動が苦手な子には、恐怖心で跳べない心理的

因や跳び方が分からない技術的原因がある（水島，2013）。本エピソードにおけるB'も同様に2つの原因から跳ぶことができていないと読み取れる。

これらの原因に対して、Bは心理的原因に対して慣れさせるために台の上に座らせて話したり、そこで遊ばせて、まずは慣れさせるように工夫をしている。さらに技術的な原因に対して、助走局面と踏切局面に焦点化して遊ばせて工夫をしている。その結果、B'を跳ばせることができ、B自身も達成感を感じている。その背景にはB自身が跳ぶことができたことと、B'を跳ばせる手立てを考えて遊びながら行かせたこと、その場をBに任せた体育教員の場づくりがあったため、結果B'が開脚跳びをすることができたと考えられる。

このようにB'と遊びながら、最終的に開脚跳びをできるように工夫をしてできるようにしたことが体育の魅力を感じ、体育科への興味を高めたと考えられる。

5 まとめ

本研究では体育科への興味をもった小学校教員志望の女子学生の運動経験、とりわけ体育授業において行われた“学び合い”に着目しながら、どのように体育科に興味をもっていったのかを明らかにしてきた。

3つの“学び合い”のエピソードでは、「運動が苦手な子を教える」という立場で、運動が苦手な子に対して「運動を楽しんでもらいたい」という態度を取っている。また運動が苦手な子に対して「気づきを促す助言」や「運動遊び

の仕方の工夫」をすることで、運動に取り組む姿勢が変化したり、できないことができるようになった。そのような変化に対して、体育科の魅力を感じ、体育科への興味をもっていったと考えられる。

その“学び合い”の背景には、教える側は幼少期においてとりわけ運動は好きではないけど、運動有能感を有していた背景がある。Aの「走ることだけ得意」「おにごっこで友達にコツを教えてほしい」と言われたこと、Bの「走る記録の伸び」は「足の速さ」に関連しているが、「足の速さ」は幼少期において運動有能感を形成する重要な要素である可能性が示唆される。

そして運動が苦手な子との関係は学級や部活動といった体育以外の時間において運動に関する助言をしても運動が苦手な子が受け入れて、やってみようと思ってもらえる関係があることが体育の“学び合い”の前提にあることが考えられる。

これらの“学び合い”のエピソードには、用具の活用、グループの編成の仕方、場づくりの仕方から「教員の間接的な支援」が読み取れ、“学び合い”の仕掛け方も体育科への興味を持たせる要素であると考えられる。

今後の課題として、本インタビューから「小学校時での担任の影響」が新たに体育科への興味をもった要因として聞き出すことができた。どのような担任でどのようなエピソードから体育科への興味をもったのかを明らかにすることが今後の課題である。

引用・参考文献

- 萱間真美（2007）質的研究実践ノート 研究プロセスを進める clue とポイント，医学書院。
- 鯨岡峻（2005）エピソード記述入門 実践と質的研究のために，東京大学出版。
- Lyn Richards, Janice M. Morse 著，小林奈美監訳（2008）はじめて学ぶ質的研究，医歯薬出版株式会社。
- 前田幹夫（2013）マラソン・持久走が苦手な子の指導と動機づけ，児童心理67（16），49-55。
- 水島宏一（2013）跳び箱運動の指導，児童心理67（16），67-72。
- 文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説 体育編，東洋館出版社。
- 文部科学省（2013）平成25年度学校基本調査。
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/08/attach/1338337.htm
- 文部科学省（2013）平成25年度全国体力・運動能力・運動習慣等調査結果。
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kodomo/zencyo/1342657.htm
- 大杉貴康，出村慎一，藤谷かおる（2008）体育授業に対する生徒の価値態度の構成要因およびその構成因子の性差の検討，日本教科教育学会誌31（2），29-38。
- 清水紀宏（2002）運動不得意児童の授業研究，金沢大学教育学部紀要（教育科学編）50，91-102。
- 白旗和也（2013）小学校教員の体育科学習指導と行政作成資料の活用に関する研究，スポーツ教育学研究32（2），59-72。
- Smith, K. A. (1996) "Cooperative Learning: Making 'Group work' Work" In Sutherland, T. E., and Bonwell, C. C. (Eds.), Using active learning in college classes: A range of options for faculty, New Directions for Teaching and Learning No.67, 71-82.
- 徳永幹雄，橋本公雄（1980）体育授業の「運動の楽しさ」に関する因子分析の研究，健康科学2，75-90。
- ウヴェ・フリック（2002）質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論—春秋社。
- 山口智子，西川正之（1991）援助要請行動に及ぼす援助要求者の性，対人魅力，および自尊心の影響について，大阪教育大学紀要 第IV部門40，21-28。